

鬼怒川氾濫による常総市の水害被災地調査



写真-1 茨城県の災害ボランティアセンター

9月19日（土）、REICの箕輪常務理事と事務局松田が常総市の水害被災地を訪れ、その状況を調べてきました。9月10日の堤防決壊から10日近くが過ぎておりましたが、まだまだ現地は大変な状況で、腰上まで浸水した家屋では、使えなくなった家具などが沢山出されていました。県の災害ボランティアセンターでは、国立研究開発法人防災科学技術研究所がeコミを使って、各種ボランティア活動のサポートを行っておりました（写真-1）。また、各地の浸水した深さを調査するため、専門の研究者達が現地で活動しておりました。

鬼怒川の近くまで行き、川縁を歩いてみましたが、水量は大幅少なくなっているもののまだ川の色は茶色のままでした。河原には、もの凄い勢いで流れていた濁流の痕跡があちこちで見受けられました（写真-2）。

決壊した場所より少し上流にある土手を越水したところ（ソーラーパネルが設置されていたことで有名になった場所）では、既に土手の（仮）修復作業が終わっていました（写真-3）。



写真-2 決壊した箇所近くの鬼怒川の様子



写真-3 決壊した箇所の上流の越水地点

また、決壊した箇所の堤防の仮復旧もほぼ終了しており、決壊から10日程ということを見ると国土交通省の対応は早かったと思います。しかし、決壊した付近の土地は、濁流が長時間流れ続けたことにより捲れ上がったような状態になっており、復旧には大変な時間と労力が掛かることが想定されます。被災された方々には、改めて心よりお見舞い申し上げます（写真-4）。

今回の水害被災地調査で、改めて災害情報の適切な発信とその利活用が大変重要であることが実感されました。REICでは、今後とも様々な災害情報の発信と利活用に必要な活動を進めていきたいと考えております。会員の皆様にも色々な形でご協力を頂けると幸いです。何卒宜しくお願い申し上げます。



写真-4 決壊した堤防の修復状況